まい　あーと・彫塑「動くニワトリ」by 清積寛之

サイタ

空に紺碧　大地は緑
木木に純白の薫り
そよとふく風を　はらりとかわして

サイタ

木木に純白の薫り
そよとふく風に　ひらりと舞って
まぶしさに　こころ踊らせ

サクラガ

この睦まじさ　この艶やかさ
妖しげに　こころ誘われ
花　花　花。

サイタ

▲玉川上水

▲北口たましん本店前

▲ジョギングも楽しく／根川付近

◀根川／市営球場付近

▼春の陽光を浴びる桜

▼根川／市営球場付近

▼市営グランド付近

▼桜まつり／サンシャインパーク

▶市民体育館付近

▼昭和記念公園

▼サイクリングも軽やか／昭和記念公園

観劇は楽し

演劇好きが集まって、何とか自分達の街で良い作品を安く観ることが出来ないかと考え、力を合せて劇団をよんできてしまった。「三多摩演劇をみる会」（錦町2丁目）には真に演劇を愛する人々が集い和気あいあいと観劇を楽しんでいる。

錦町にある「三多摩演劇をみる会」（広石幸弘・運営委員長）は演劇好きが集まって13年前に始めた。当初演劇を安く観るという目的もあって特に宣伝をするということもなかったが、会員の目的に共鳴する人が口コミで次第に増え、現在は2千名を越える会員数の組織に成長した。

300円の入会金と月々1400円の会費で誰でも会員になることが出来る気軽さが受けている。会員は2か月に一度演劇を見ることが出来る。会員数が増えている現在、一回の公演で入りきらないので二回から三回に日を分けて公演が行われるが、観たい日も会員の希望でわりあい自由に選べる点も心配りが感じられる。運営面の色々な所に同じように、誰もが楽しく観劇出来るようにという配慮がされているのは、やはり本当の演劇好きが始めただけあってゆきとどいている。

そんなことからか、会員は老若男女さまざまの人が集まっていて、近所でサークルを作っている場合がかなり多い。自然と会場はなごやかな空気にあふれ、2千名を越える団体でありながら大へんに家庭的だ。本来「会」というものはこうあるべきと思えるものを有している。自ら演劇をする者も研究に来ていたり、そうした人々とのコミュニケーションも交され、演劇を通しての暖かい人と人との交流が生まれている。

また、会員によってすべてが運営されているので、席の割当て、受付、搬入なども会員の当番で行われるのもユニークなところ。初めて当番に当った人は慣れない事に最初はとまどうようだが、慣れるに従い知人が増えたり自ら運営に当るということから、喜々として行う人が多い。そんなことから会場はいやがうえにも楽しい雰囲気がみなぎってくる。

単に観るだけではなく、交代でまわってくる当番の担当をすることによって、「お客さん」ではなく、会員としての自覚が出来てくる。自然と会の中での親睦が深まってゆく。新しい友人を見つける絶好の場といえる。

演劇好きにとってうれしいことはまだある。観劇後に出演者達との親睦会が開かれるのだ。普段めったに会えない役者さんと直接話をすることが出来るのが好評だ。その日の劇の事や次回についてなど、いろいろな話題が交される。中には思わぬ良い話を役者さんがしてくれたりする。舞台の上の役者さんが、ぐっと身近に感じられ、親しみを感じることが出来るのも、演劇好きにはたまらない魅力だ。観る側と演じる側が一同に会してますます会は盛りあがる。

今まで都心まで出ていた人が、自分の住む街の近くで、本当の観劇が出来る。都心に出るにはクツから服装に気を配って少々かしこまって観た演劇も、この会では気軽に、仲の良い知人とも一緒に観ることが出来るのである。違った意味での本来もつ演劇の楽しさを知ることが出来、また楽しさを引き出してくれるのである。

▶花束贈呈も会員の手で行われる。

▲出演者との歓談のひと時。

▲くつろいだ中に観劇を満喫。

▲会場には保育室も設けられている。

▲受付けも担当の会員の応対。

●お問い合わせ●
三多摩演劇をみる会
立川市錦町2－3－31 ☎0425(23)5031

〔立川クイズ2月号答〕

日本の人口は1億150万5千121人で中、5千988万5千121人が男性で6千161万6千784人と圧倒的に女性が多いが、昨年15万人を越えた立川市では7万5千221人が男性で7万4千865人が女性（'87 2月調べ）と男性が多い。

答えは①

立川のモニュメント ③ 学校教育発祥之地

「学校教育発祥之地」柴崎町四丁目。公園内にある石碑。明治十一年、独立校舎で学校教育を行なった立川最初の地。独立校舎というのは、当時としては珍しかったという。これを記念して昭和二五年、一小創立八十周年の際に、石碑が建立された。

普済寺（柴崎町）正門から東に向かって細い道を歩くと、その道沿い右手に、小さな児童公園がある。

その公園内、桜の木の横に、小さな公園には不釣合なほど大きな碑がある。「学校教育発祥之地」と刻まれた石碑は、明治初期、そこが独立校舎を建て、子ども達に学校教育をほどこした立川初の地であることを記している。「明治十一年四月、柴崎村沢（現在の柴崎町四丁目）に六四坪の校舎を新築…云々」と碑文は、誇らしし気にうたっている。それより以前、明治三年三月三日、普済寺内に読み・書き・そろばんを教える郷学校が開かれた。が、まだまだ寺小屋に近いものだったという。その当時、学校建設に力を尽くしたのが、組頭であった板谷元衛門と普済寺住職の柴崎維船。彼らは、私財を投げうち、奔走した。教育への無理解と貧しさからか、なかなか子どもを学校へ出したがらない村の人々を説得し、ときには教鞭もとったようだ。

立川最初の独立校舎は、大正三年、今の一小に新築移転するまで三十六年間、柴崎町の地で、子ども達と共に歩み続けた。泣いたり、笑ったり、教師と子どもの「手作り」の教育が、そこで、行なわれていたのだった。（H・H）

真如苑だより

ぽかぽかと、暖かい太陽が様々なものに生命を与えます。野や山に新たな命が息ずき始める頃、街も華かな空気にあふれるようです。今月も皆様のお越をお待ちいたしております。お気軽にどうぞ。

■日時　4月18日(土)
午後2時～4時
■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■立川市民（成人）に限らせて頂きます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

漢字テスト⑮

空欄に一字押入を試みよ。

春風□蕩
百□不撓

表紙は語る

駅ビル9階で開かれた『立川市立小学校連合展覧会』の会場に少々奇妙なニワトリが現われた。幸小学校の清積寛之くんが5年生の時の作品だ。ポーズが大胆。もちろん本物の動きとはちがうことは制作者は百も承知なのだが、何しろグルリと後に曲げた首が印象的で来場者の目をひいていた。

作品は小学校の授業で制作したもの。図工担当の白石スミ子先生がニワトリを教室に放して観察をさせて作らせたもので、トリの動きを大切にのことばを素直に受けた清積くんは一瞬の動きを見のがさずにいた。「クラスのみんなが同じ姿のニワトリばかり作るので、みんなとは違うのを作りたかった」と、後を振り向いた瞬間を捉えた。しっかり観察をしながら、芸術家魂ももちあわせているのが最後のひとひねりに出ている。素直な少年の心とすこしばかり大人っぽいレジスタンスが同居している。

漢字テスト・答
春風駘蕩
百折不撓

工房から

●街には光り輝く新人たちがあふれている。一人一人に当る陽光が、希望に満ちた顔をいっそう輝かせる季節だ。まぶしいのは太陽だけではない。●昨年の新入生は今年はどんな気持ちでこの季節を迎えるのだろうか。昨年の自分を思いうかべるか、先輩となった自分を見つけるか。心新たに迎える春の香りはどんな香りだろうか。●ピカピカの一年生に同伴する人は本人より満面の笑顔をたたえていたり、はにかんだりする。我子の成長を確認するのは少しばかり気はずかしいものなのかもしれない。さらに成長する我子の節目は親だけではなく、周囲の人にもまぶしく映るのではないだろうか。●桜色の笑顔が立川にもあふれる。●青麦に 渡る風うけ えくてびあん。

（編集）石塚敦美　大野玲子　神山清子　関川理　田中恵子　栗島弘子　原田礼子　中沢正弘
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269

月刊えくてびあん　第33号
昭和六十二年四月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング　3F
電話　○四二五(28)００８２
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

10 立川 御馳走館（ごちそうかん）

創る人がいて、
味わう人がいる。
この華麗なる当
り前の世界。

お好み焼なら『やきやき亭』といわれるようになりたいと店主の永井正衛さんは、吟味された材料を広島から取寄せることにした。その心意気がひと味違う本場の味を立川にいながらにして楽しませてくれる。ボリュームたっぷりの一枚一枚に昨年八月開店以来着実にファンが増えているのも当然か。

高松町大通り沿い ㉔七九三六

広島焼 500円

魚貝類がたっぷり入った大阪焼はこの後ひっくり返して出来上る。

▲キャベツ、天カス、豚肉、焼そば、玉子とたっぷりと具を入れ蒸らすように焼く。